

追 悼 の 辞

湖尻賢一教授は、何の前触れもなく突然逝かれた。教授は、本学が、そして何よりも経済学部が、精神的にも、実務的にも柱石とたのむ人であった。その重要人物が、病魔によって不意に奪い去られたことで私たちの未完成な学部の悲嘆と不安は、ほとんどその極に達した。今は、教授の逝去から2カ月が経過し、その間国内では異変が相次ぎ、学内・学部内でもそれなりのスケジュールの進行がみられる。そうした生業（なりわい）に忙殺されながらも、私たちは、今もって湖尻教授を失った痛手から全く立ち直れないままである。そのことが逆に、教授の在職20年間の事績の重さを端的に物語っている。

今は故人となられた湖尻賢一教授は、昭和40年早稲田大学第一商学部を卒業され、ただちに同大学大学院商学研究科にすすみ、研究者としての道を志しておられる。そして、昭和45年4月九州産業大学商学部にて専任講師として着任された。爾来、教授は、本学において社会政策総論、中小企業論の講義を担当され、持ち前の研究意欲と旺盛な行動力によって、教育と研究に多大の成果を挙げてこられた。昭和58年には本学商学部教授に任ぜられ、また平成元年には、国外研修員として米国アビリン・クリスチャン大学に派遣された。

教授は、同僚の間でも話題にのぼるほど、講義やゼミナールを通じての学生との接触に情熱を傾けてこられた。その一方で、日本社会政策学会、日本中小企業学会の会員として活発な学界活動を展開された。また、かたわら福岡県地域雇用開発協議会の委員として地域のために有益な発言をつ

づけておられたことも人の知るところである。

教授は、最近になって20年来取り組んでこられたテーマである「博多織業の分析」の成果を集大成する計画を実行に移された。私は、そのお仕事の完成を心からお慶び申し上げた一人である。しかし、それが書物のかたちをなし、大輪の花を咲かせる前夜に、教授は、この世を去ってしまわれた。58歳という若さで、この一番大切な時期に生涯を閉じなければならなかった湖尻教授の無念の胸中は、察するに余りあるものといわねばならない。

私としても、湖尻教授の研究室のドアを叩き、かのスナック風の椅子に腰を下し、遠く福博の市街を眺めながら、学部運営のことを相談したり、雑談したり、というのは、もはや過去のことではない。それを思えば、まことに淋しいかぎりであり、痛惜の念にたえない。雑談といえ、あるとき教授は、自分が人より数年も遅く大学に入った事情について語られた。湖尻教授が、その人生経験をつうじて培ってこられた師弟関係や家庭生活についての信念は、教授が、いわゆる「晩学の人」であり、「苦労人」であったことに強く裏づけられていたようである。教授は、ゼミナールの学生の一人ひとりに、自分の若き日の姿を重ねておられた、といえ、私の穿ちすぎであろうか。

私たちの経済学部は、ことあるごとに杖とも柱とも頼んできた湖尻教授を失ったが、教授が学部と学生に注いでこられた努力と情熱は、何物にも代えがたい遺産である。この貴重な遺産を継承し、学部発展の礎（いしずえ）とすることを私たち教職員は念ずるのみである。

1995年4月16日

経済学部長 武野 秀樹